



青木村子どもはつらつネットワーク通信

令和4年度 第208号 3月1日

青木村子どもはつらつネットワーク事務局発行

今月号も第19回信州“教育の日”青木大会の「通学合宿」についての座談会の様子をお伝えします。



第19回 信州“教育の日”青木大会 座談会テーマ 結ぼう 人の輪・地域の輪 ～通学合宿がくれた宝もの～ (後半)

教育長 通学合宿なのでずっと育ちを見ていてくださったので、子どもたちの成長がとてもよく分かりました。大学生さんたちの反省会の中で、グループがだんだん家族になってきた事などの発表をしていますが、その様子を続けて小岩井さんお願いします。

元信州大学教育学部教授	土井 進さん
青木村教育委員会教育長	杏掛 英明さん
下諏訪南小学校教諭	小岩井 啓さん
野沢小学校教諭	真先 陸さん
青木中学校生徒	渡邊 紗綾さん
青木中学校生徒	花城 空さん
保護者	鴻巣 博子さん

小岩井さん 子どもの時の経験や思い出、大学生として参加した時の思い出がたくさんあります。土井先生の話や中学生2人の話を聞いていると、確かにそうだったなと思い出し色々な事があり過ぎて言葉にまとめるのが難しいです。小学生として参加した時も、大学生として参加した時も本当に色々な人と出会わせていただきました。小学生の時は通学合宿が始まった頃で内容がよく分らなかったのですが、いざ始まって



みると大学生のお兄さんお姉さんたちが本当にやさしく接してくれて毎日遊ぶのが楽しかったです。今思うと肩車をしてもらったり、戦いごっこをしてもらったり色々な事をして遊ばせてもらったと思います。一日の目当てを持って4年生から6年生と一緒に過ごす事で、全く話した事のない下の子や上の学年の人と話した事や、何か協力してやった事がすごく良い経験だったと思います。僕が6年生の時、ご飯を作る時だったと思いますが、偉そうに4年生に教えてあげた事を何となく覚えて





います。僕にとって下の子に教えてあげた事は良い経験だったと思うし、子どもの時に色々な人に出会わせてもらってありがたかったと思います。

大学生の時は、通学合宿をまたやってみようと思って入った訳ではありませんが、同期の真先君がやっているという事で参加しました。自分が合宿長として活動していく中で、子どもたちやお家の方、教育委員会や地域の方など色々な人と繋り話をした事が、のちに先生になった時に大事な事だったと実感しました。小学生の時も大学生の時も本当にたくさん学ばせて頂いたと思っています。

教育長 聞いて改めて思いましたが、子どもたちとの関係だけではなくて、地域の人との折衝とか、合宿長になったら後輩の学生さんたちに指示を出さなければいけないとか、本当にそれで育つ事が大きいと改めて分かりました。私たち教育委員会は学生さんに「早く寝な！寝な！」と言っています。でも寝ないですね。何をやっているのですか。

小岩井さん 次の日の予定の確認や、反省を出したりしながら、お家の方が書いてくださるお手紙の打ち合わせや演出を考えたり、最後に渡す思い出に残るプレゼントを夜な夜な作っていました。いつも特別な時間なので、一日の中で終わらず遅くまでやっていた記憶があります。

教育長 学校の職員室でお茶を飲みながら子どもたちの話しがいっぱい出る学校は本当にいい学校ですが、そういう雰囲気ですね。



小岩井さん そうですね。真先君も言っていた通り、「こういう事があったね。」と学生同士でとても楽しく話して盛り上がっていました。

教育長 学生さんも実は一緒に成長しているのが横から見ていてよく分ります。大学2年生はどちらかというと高校生に近いような学生ですが、4年生になると本当に一緒に学校を作っていくたいと思わせる様な見事な若者に育っているといつも感じていました。



次に保護者の立場としてお話をお聞きしたいと思います。3人のお子さんを育てられて通学合宿を始めとして様々な学生企画やサマーキャンプなどの村の活動に積極的にお子さんを参加させて来られた保護者の立場から、これらの活動に

に参加させる保護者の願いとか子どもたちの変容した姿等についてお話し頂きたいと思います。



鴻巣さん 長女が小学校に上がる時に主人の実家がある青木村に引

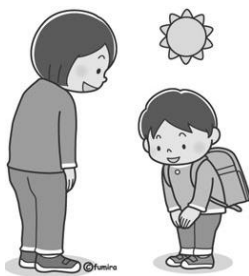


っ越して来ました。越す前にテレビで青木の教育の特集番組が放送されて、特に通学合宿についてはとても詳しく放送されていました。その中で学生さんや子どもたちが成長していく姿を見まして、来るつもりでいましたが、青木村で子育てが出来る事を楽しみにしていました。小学校に上がって、大学生のイベントの通知があり「どうする、行く？？」と聞くと、子どもたちは「行く行く！」という感じで毎回のイベントに楽しく参加

させて頂きました。通学合宿はそれぞれの子どもたちが楽しみにしていました。一週間子どもを預けた初めての年は、寂しくて「どうしているかな。」と心配していました。本当に楽しそうに帰って来て、最後に学生さんから一週間の思い出が詰まった記念のプレゼントをもらって来ましたが、それが本当に手の込んだ物で、あれだけの期間に何でこんなに凄い物が出来るのだろうと思ったものです。しかも毎回班ごとそれぞれに違っていて感心しました。最近になって通学合宿の事を聞くと「本当に楽しくて帰りたくなかった。」と言って、そこでの経験は子どもたちにとって良い思い出で、ずっと心に残っていると思います。合宿に参加させてもらって何か変わったかということ、急に何か変わったという事はありません。



別の話になりますが、中学生の時に職場体験で上田市のお店に行って帰って来た時に「上田市の人はずれ違う人にあいさつをしないよね。」と言っていました。青木村は必ず知り合いやすれ違う大人たちがあいさつをしてくれるし、中学生は



遠くからあいさつをしてくれるので、それが当たり前ですごくカルチャーショックを受けていました。本当に良い所で育てさせて頂いていると思います。もう一つ、大学へ行った娘が選挙で実家に帰って来たのですが、それを大学の他の友だちに「選挙に行くから実家に帰るね。」「え？選挙で家に帰るの？」と、とても驚かれたと言っていました。同級生のママ友とかも「うちも選挙で帰って来たよ。」と、それが普通で本当に素直に育てられているなと感じています。

教育長 いっぱい宣伝して頂いてうれしいです。青木にいとこれが当たり前だと思いますが、実は外へ出ると青木の活動は当たり前ではないと感じます。話を聞いて渡邊さんどう思いますか。

渡邊さん 先程のあいさつのお話ですと、私もよくすれ違う人には積極的にあいさつするようにしています。今のお話を聞いていると、ここは特別なのだとびっくりしました。



教育長 花城さんはどうでしょう。

花城さん 地域の皆さんがやさしく接してくれて本当にありがたいと実感しました。

教育長 成人式でもそのような事を言ってください。(笑)

このような活動で大学生の深い思いがあったり、親御さんの期待があったり、参加している子どもさんは大学生が大好きだったりする、でもそこで学ぶ事がたくさんあるというお話しをさせて頂きました。最後のまとめとして、土井先生が考えられていた実践的指導力の考え方に至った信大 YOU 遊の学生さんの育ちや、青木村を舞台にして続いてきた通学合宿の成果についてまとめて頂けたらと思います。



土井さん 文部科学省は教員養成についてこれだけは力を付けてくださいと全国の大学や教育関係に提示しているのが、今おっしゃった実践的指導力という言葉です。この言葉の中に何が入っているかというと、一番真っ先に使命感というのが入っている、教育に対する使命感、その次は児童生徒への教育的愛情、三番目に各教科等の授業実践力、これらをひっくるめて実践的指導力と文部科学省は言っています。ところがこの言葉に対してアレルギー反応を起こしているのが大学です。大学は各教科等の授業指導力、学問による力、これらを育成するのは喜んでします。けれど使命感をどのように育てればいいのか？教育的愛情というけど、それは大学とは関係ないでしょうか？要するに自分たちのできない苦手な事は敬遠する、引き受けようとしていない、これが十年前も今も変わらぬ現実です。大学は学問をするところで、使命感を教える事や教育的愛情を教える事は俺たちの教育ではないと。



このような中で私は信大に来た時、学生が一番何を求めているのかということ、このような教育的愛情や使命感、教師としての根っこの部分、大黒柱、この部分を鍛えるそういう科目、授業を求めています。ところが入学してから3年間、大学の授業を受けて来たけれども子どもとは一度も触れ合っていない、3年生の後半にようやく教育実習があり、教育実



習に行っただけでも毎回毎回授業の作り方そればかりで、使命感や教育的愛情そんなのは一言も話さない。このような訳で学生たちは教育実習で教わる事はたくさん身に付けますが、どうもまだひとつしっかり分らない事がある。その使命感は授業科目ではなく強制力はありませんが、学生が青木村へ来てやりたい事をやりたいようにやる、その主体性や、やる気を持って関わり色々教わってきた。そうしないとこのような力が身に付かない、資質が付かない、私としては本当に青木村前教育長さんが「通学合宿をやりた
い」とおっしゃった時に「やりましょう！」だけど私がやるわけではないのです。うちの学生がそれを「やってみたい、行きます！」学生がこう言ってくれなければどうにもギブアップなのです。学生が生まれ育った福井県の土地柄と青木の風土が似ていてやってみようという気持ちになった時に前青木村教育長が「失敗してみろ、失敗してもいいんだよ。」と、これほど力強い励ましの言葉はなくて、彼は2月16日帰る途中の車の中で「先生やります！」と言いました。この青木村の教育方針としての『社会力』は子どもたちが人と人が繋がって一人前の社会人として育つ事が出来る事です。「そのためには4,5,6年生のこの時に、2泊3日ではなく6泊7日で通学合宿をやらなければならない。」とおっしゃるのでそういう事で始まりました。



学生たちはこの通学合宿でこの子どもたちと触れ合うだけでなく、本当に心の広い村だと思ふのは、学生たちに「無料で温泉に入っていていいぞ、布団なんか持って来なくてもいい、村で用意しておくからみんないつでも泊まりに来ていいよ。」このような広い心で受け入れてくださるから非常に励ましになります。そしてお風呂へ行けばお年寄りの方や地域の色々な人と出会う、そうした中で彼らは何を学んだかということ、大学ではとても学べない事として、ある学生はお酌の仕方を教わり、「このような事は大学にいてはとても学べない、大変勉強になりました。」と言っていました。またある学生は積極性が無くて、ぐずぐずしていたら「自分の乗る波は自分で起こせ、と言われ、その事がきっかけで自分から行動するようになった。」と言っていました。自分がやるべき事は自分でやる、そのような事こそが『社会力』と言う事だと。学生たちは村の人たちの関わりの中で『社会力』や『人間力』を育ててもらっている。



青木村というのは、義民の里、正義の反骨の精神に富んだ村です。このような風土に学生を受け入れて頂いて反骨の精神、正義、絶対負けないこういう根性を青木村に教わっている、本当にありがたい事だと思います。大学だけではとても出来ない一番強力で肝心な事をこちらでお世話になっている。最後になりますが、

教員採用試験で通学合宿を経験している学生は、全国どこの県でもほとんど100%合格しています。試験官から言われるのが、「面接してみればすぐにわかります。まるで違います。」これも青木村のお陰と感謝しています。本当に感謝申し上げます。



教育長 学生さんは青木村へ来ても単位にはなりません。授業を休んで一週間来てくれます。本当にその情熱には感謝しています。19年という長い年月を継続して来た事で今日のこの座談会が可能になりました。今後も「村の子は、村で育てる」という言葉を大事にして多くの人のお力をお借りしていきたいと思います。何度も出ましたが、成人式で「青木村の役に立ちたい、誇りに思う。」という成人者の発言が目立つようになっています。

今後も多くの方が子どもの成長を共に喜んでくれ、またそれがきっかけになって青木村が活気づくようなそんな活動が続けていければ素晴らしいと考えています。

感謝を込めて座談会を終わりにしたいと思います。



編集後記

2ヶ月に渡り通学合宿についての座談会の様子をお伝えしました。「村の子は村で育てる」という言葉を大切に、これからも子どもの成長を応援していきたいですね。座談会に参加された皆さんありがとうございました。

令和5年度前期はつらつネットワーク参加団体活動計画表を作成いたしました。詳細は、各団体の代表者または教育委員会（49-2224）へお問い合わせ下さい。

